

第十回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

一ノ瀬 正樹 著『人格知識論の生成—ジョン・ロックの瞬間』

(1997年5月20日 東京大学出版会 刊)

一ノ瀬 正樹 いちのせ まさき 昭和32年(1957)生まれ。茨城県出身。専攻は、哲学(因果論・人格論)。東京大学文学部卒業、東京大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程単位取得。受賞作により博士(文学)の学位取得。東京大学大学院人文社会系研究科助教授(受賞時)。オックスフォード大学客員研究員を経て、現在、東京大学大学院人文社会系研究科教授。著作は、『人格知識論の生成—ジョン・ロックの瞬間』(第6回中村元賞受賞)、『原因と結果の迷宮』、『原因と理由の迷宮—「なぜならば」の哲学』、編著は『生死学[5] 医と法をめぐる生死の境界』、訳書はM・セインズブリー『パラドックスの哲学』、他がある。

受賞のことば

日本人が西洋哲学を学ぶことの意味について、いつも気になっていました。結局は単なる受容であり、しかも日本に閉塞した歪んだ学問形態ではないか、と。けれども、今回このような光栄な賞をいただくことで、改めて思い至りました。まさしく和辻哲郎という大先達が体現したように、日本人が西洋哲学を学びながらものを考えるという行為自体、固有に日本的で生産的でありうるのです。和辻倫理学を範としながら、さらに考え続けていきたいと思えます。

《選考委員評》

勝部 真長

近世ヨーロッパ哲学には二つの流れがあって、一つはデカルトに発し、もう一つはロックから発している。カント自身はデカルトとロック両派を綜合したつもりでいたらしいが、客観的にみればカントを継承した人々は、ロック的伝統ではなくデカルト的伝統に立っていたからである。ロックの生存時、彼の哲学の反対者はデカルト主義者とライプニッツとであった。ライプニッツのもとでは、英国の経験論的手法はドイツに入りにくかったのである。

ロックは人間の心は白紙にひとしいとし、知識は経験に由来するとし、その知識は「誰か」どのような状況で獲得したか、という瞬間性の観点を問題にした。しかるにカントは「経験」を没人格的な感覚、知覚と同一視し、近世認識論全体を歪めてしまったのである。

この歪みを正し、ロックの哲学のなかに人格知識論が生成していたこと、このことを見届けることが本書の主題である(序章、人格と知識の融合、十一頁参照)と著者はいう。

ロックの主著は、『人間悟性論』、『政治についての二論文』、『教育論』、『自然法論』等であるが、本書ではⅠ知識論の構図、Ⅱ人格概念の確立、Ⅲ人格知識論の現出、の三つに分けて論じてあり、副題の「ジョン・ロックの瞬間」という意味が私にはよく分らない。しかしロックの当時、英国哲学界はニュートン力学の権威によって支えられていたというから、或いは持続性・瞬間性に別な意味があったのかもしれない。

とにかく一つ一つの事柄を丁寧に積み重ね、その瞬間的営みの構成から湧き出る喜びを知るといふ英国経験論の面白さに気づかせてくれるのが本書の特色であると思う。ロックは教育の主目的は「人物の養成」にあると述べているのだから。

湯浅 泰雄

従来の西洋哲学史では、ジョン・ロックはイギリス経験論の開祖として、認識論の発展の過程に位置を与えられてきた。また政治学史では、彼は、名誉革命のイデオログとして知られ、アメリカ独立宣言に大きな思想的影響を与えたことが評価されている。これは、近代哲学から生まれてきたヒューマンズムの人間観である。けれども、この二つの位置づけは、

理論的整合性を欠いている。従来のロック理解では、この二つの論点は結びつけ難い。

近年のポストモダンの思想的動向に伴って、哲学における理論的考察の基礎には実践的倫理的問題があるということが注意されるようになってきた。著者一ノ瀬氏は、このような視点に立ってロックの人格概念に注目し、近年のロック研究の成果をも詳細に検討している。

ロックの有名な「白紙」(タブララサ)説は、デカルトの生得観念の批判から始まったものである。それは、単に外界からの感覚刺激を受け取るだけの役割を果たしているだけではない。その根底には、自由で責任ある自律的人格を形成する行為と努力がおかれているのである。知識は、そのような人格形成の上にはじめて成り立つものなのである。それによって知識は、教育制度や学問に根拠を得ることができる。社会的次元の領域に対して力を持つ知識となることができるのである。イギリス近代哲学の先駆者としてデカルトと比べられるフランシス・ベーコンの「知は力なり」という思想は、社会的偏見を批判する知識という意味があるが、ロックは、人間は主体的人格を確立することによってはじめて真の力ある知識が生まれるということを明らかにしている。本書は、このような新しいロック像を明確に刻み出し、近代哲学史研究に重要な一石を投じた好著である。

坂部 恵

ここ三、四〇年の世界の情勢の推移と哲学思想界の目覚ましい変転の中で、哲学史研究という比較的地味な分野においても、着実に一九世紀このかたの定型的な見方を踏み越えるあらたな転換が進行しつつある。ロックをはじめとするいわゆるイギリス経験論の研究に関してもこうした転換は顕著に認められる。言語分析、言語行為論、行為論、社会哲学、人格論などの分野で現代の英語圏の哲学がリーダー的な役割を果たしつつあるだけに、そうした新しい動向のいわば歴史研究への反作用は一層著しいといえるかもしれない。

一ノ瀬氏の今回の研究は、こうした新しい動向を周到に消化し、一世代前のイギリス経験論研究とは大きくことなつたあらたなロック像の提示を試みたチャレンジングな試論である。知識と実践の世界を大きく二分した上で、それぞれの領域に即して認識論研究、実践哲学・社会哲学研究という視角からロックを見るという従来の行き方に対して、そうした二元論にとらわれることなく、「探求」や「同意」を含めた広い意味での行為の観点から、知識や自然法の問題をひとつの場において読み説いて行く行き方がその核心となる。「人格知識」という規範や決断を含めた知識の成立の場の概念を中心に据えて、先行諸研究を批判的に位置づけながら、ロックの二つの主著で展開される主張を結ぶ脈絡を説き明かしていく議論は重厚で読み応えがある。

相互人格的世界のあり方を、「刑罰」というきわめて具体的な対人的かかわりの場に定位しつつ展開する本書の終わり近く議論もさることながら、ロックの哲学が、近代の効率優先で拡大志向の資本主義経済の基礎となったという世評とは裏腹に、そうしたタイプの社会への本質的な批判を含むものであるとする指摘は、ラスキンのことなどおもしろいあわせて、わたくしにはとりわけ清新なものにおもわれた。